

全共闘運動が切り拓いた地平

—60年代運動の総括—

実行委員会企画

講演者 廣松 渉
塩川喜信
河宮信郎

司会 宮下清一（明大全共闘）

5月29日 P・M 2:00 4番教室



全国で同時同質の蜂起を克ち取った全共闘運動は、ブルジョアジーの〈階級解体〉政策に鋭く、大衆武装をもって対決し、市民社会総体の全面的流動を激成したのであった。またそれは、ノンセクト・ラジカルな登場に見られるように、党派の介入、指導を媒介しつつも、党派の枠では包摂しきれない先進の大衆が層として形成され、権力の〈階級解体〉に対して〈階級形成〉を対峙すると同時に、学生存在それ自体に対する追求から発したところの精神労働の破壊と創造を志向する闘いとしてあったが故に、政治革命と文化革命の同時性・同質性を萌芽的にはあれ内包する重要な形態としてあったのである。その意味で、全共闘運動は、まさに政治・文化総体、社会総体の全面的流動を保障する運動としてあったのである。

しかし、その流動と高揚とを量的に保障したのは、社会に対する不満、しかも単なる不満を根底にした反撥でしかなかったことも、一面の事実として、否めない事実であり、その流動は今、赤裸な、しかしグロテスクな、腐臭の漂う巨大な沼地に直面している。沼は巨大であるが故に、また人間の実存に触れる赤裸にグロテスクな様態で横たわっているが故に、単なる決意や武装の強化でもって踏破しきれないものとして、僕たちの眼前にある。

しかしそれは、全共闘運動の自然発生の性格が当然直面すべきものとして直面したのであり、そうであるが故にそれは、避けられない試練として存在するものと考えられる。その試練に耐え

きれず北風の中に背中を丸めて去って行く者の、立てたコートの襟が痛々しく印象的であろうと、あるいは強い決意だけでもって果敢に突進する者が、計り知れないどろ沼の深みの中に消えてゆく姿がいかに雄々しく美しかろうと、僕たちは、それらを共有することを拒否する。僕たちが唯一選ぶのは、全共闘運動が切り拓いた地平からどろ沼の彼岸にあるものを目的意識的に追求する、〈持続する苦闘〉でしかない。そして、そのために必要なのは、未来を展望するための現在の認識の深化を計ることであり、その深化を变革の武器へと転化するためには、闘争過程を主体的自己に肉迫する問題として対象化すると共に、自己自身をも歴史的存在として対象化し、自己と現実との間に形成される矛盾を媒介にした恒常的認識の深化に依拠しなければならない。

もとより大学とは、文化・教育に対する創造的活動の機関であり、知的生産の場である。そしてそれは、いかなる形においても、国家権力によって侵害されることはなく、万一侵されても正統な抵抗権はその手中にあるとされて来た。しかし、それは飼い犬が鎖につながれ、チンチンを習わされ、それを拒んだら晩飯をおあずけにされ、その時に、か細い声でキャンキャンと吠える程度の権利と自由は残されているというのに等しかった。しかも、少しでも声が大きすぎて御主人様の安眠を妨げたりすると、「この野良犬め！」などという罵声が発せられ、「いや、そうなんです、御主人様。私は鎖につながれているよりはむしろ、野良犬になりたいんですよ。」などと言うものなら半殺しの目に合うのであり、実は、御主人様には聞こえない程度に吠える自由しか無かったのだ！

知的生産の場は、いついかなる時も確保されなければならない。にもかかわらず、文化・教育特に大学に象徴されるそれは国家の幻想性を支える知的ヘゲモニー機関として位置してい、まさに知的労働力再生産工場として機能しているのである。その形態を拒否し、〈大学解体〉をスローガンに掲げたのが全共闘であった。飼い犬は鎖を絶ち切ったのである。

ところで、鎖を絶ち切った犬はその後、一体何をやったのか？ それまで言うに言えなかった胸の内をさらけ出した。狡猾な、かつての飼い主どもに向って牙をむき、その陰険な笑いを凍らせた。しかし全共闘運動にそれ以外に語べき何があったのだろうか？

全共闘は〈大学解体〉をスローガンに決起し、牙をむいた。しかしそれは単に政治的暴露のための大衆決起であり、大学を政治の手段と化して平然としているブルジョア・イデオロギーを裏返しにしたものでしかなかったことも否みきれない。帝国主義暴露は存在しても、そのエネルギーを持続させ、文化的創造活動にまで止揚する政策がほとんどなく、〈大学解体〉は単なるスローガンとして終始し、それに一步でも近づこうとする努力が部分的にしか行われなかったのである。

大学は、ブルジョア支配とあくまで対決しつつも、そして、そのためには、武装や組織論を実践的に志向しつつも、自らが本来担うべき文化性を喪失した、歌を忘れたカナリアであってはならない。

全共闘運動は、その思想性が正統なものである以上、永続きされなければならないし、また、しなければならない。同時に、その質を転換し、より止揚された地平を目的意識的に追求し、そうすることによって新たな飛躍を克ち取ることが切望されている運動である以上、その根底から、否定もされなければならない。

僕たち、和泉実行委員会では、全共闘運動に関してこれ以上は語らない。僕たちは、単なる年中行事と化している〈和泉祭〉を準備する、祭の司祭者にすぎない。

これから先は、全共闘の闘争主体たる君たちが語るための余白である。全共闘運動がかえるさまざまな矛盾を、主体的に受け止め、自らが内包する矛盾として意識し、絶えず、その余白を埋めつつ変革を遂げてゆくことこそが、君たちの義務であり、権利であると考えているからである。